北九州市の文化財を守る会

会　報

No.3　47. 2. 1

発行　北九州市の文化財を守る会
北九州市八幡区西本町3丁目6番1号
北九州市教育委員会文化課内
電話（代表）093－68－4931

平尾台

北九州市内に数多く所在する文化財を守り、発掘し、広く市民のあいだに文化財に対する理解と関心をたかめることによって、文化財保護の実績を挙げ、これらを大いなる文化遺産として次代に継承させてゆかねばならない。いま、この稿を書くわたしの頭の中は、このような一般論を云々しているあいだに、すでに、現実に直面した文化財の破壊に連なる問題で大きく占められている。それは平尾台の問題である。

こんにち平尾台は、その景観を大きく変えつつある。いや、変えつつあるのではない。それは破壊されつつあるのだ。セメント原料としての石灰石の宝庫なるが故に、石灰石採掘のため、平尾台上のみごとな羊群原の大高原は、容赦なく破壊されている。赤土の地肌が雄大なあの草原に悪魔の爪あととして残り、無惨な荒廃は平尾台の息の根をとめようとしている。

平尾台は単にその景観からして百万市民が広く愛好するリクレーションの場であるというだけではない。第四紀に繁栄したナウマン象の化石も出土し、古代縄文遺跡の分布地域でもある。地質時代から原始古代を探るための重要な学術研究の対象地域であり、また生物学的には稀少植物の群生地として知られている。カルスト地形と無数のドリーネと鐘乳洞、これらは地質学的にもまだまだ調査研究されねばならない。このようなすぐれた文化財を持つことは、北九州百万市民の大きな誇りである。

国は昭和十年千仏鐘乳洞を、そして二十七年には平尾台上の一部地域を天然記念物として指定した。まことに当然のことである。しかし平尾台の重要部分は、これら指定地域だけを原形で保存することによって守られるものではない。全体が原形で維持されることにより、はじめて部分が生き完全な保護ができるのである。

このためには先ず何を措いても、平尾台上の石灰石採掘をただちに止め、現在の荒廃を旧態に復元し、同時に行政的には一刻も早く国定公園指定を急いでいただきたい。セメント会社も台上の原形を壊わさず、ドリーネや鐘乳洞の地下水路を変えない方法で石灰石採掘を考えてもらいたい。学術の宝庫であるとともに、北九州百万市民がリクレーションの場として愛好する平尾台問題に対処することは、わが「北九州市の文化財を守る会」の現下の最大の課題である。（米津三郎）

投稿

会員のみなさんから、次の原稿が寄せられました。

本紙は会員のみなさんのものです。

文化財についての意見、所感あるいは研究中のものなど、何でも結構ですから投稿ください。

平尾台と自然保護

中堀　伸二

十一月も終りというのに暖かくわたくしたちを乗せたバスは、カルスト台地へとはいって行った。

ここは現在、県立筑豊公園に編入され、今後、自然景観等の保護等の保護のため、もっか国立公園指定の運動が進められているところである。

台上各地には、カルスト地形特有のドリーネ、鐘乳洞あるいは植物など、どれを取り上げても自然が創り出した見事なものばかりだ。

また、この平尾台では数々の縄文遺跡や弥生遺跡も発見されている。

しかし、こうした自然や古代の遺跡も、いまや全国的に破壊されようとしている。平尾台もその例外ではなく、各所で石灰岩が切り崩されて、岩肌は痛ましく堀られまた、ドリーネも埋められる等々かって雄々と広がった自然のパノラマを想い起すにも忍びない。

このように産業優先あるいは観光政策優先がどういう結果を生じているのか、いまこそ真剣に考えねばなるまい。

これは先に触れたように、単に平尾台だけの問題ではない。このような企業の利潤追求の開発主義は、自然を食い荒らし、さらにこの行為が加速度的に進むならば、わたくしたちの生存そのものの破綻の危険さえ起り得ることを、肝に銘じなければなるまい。

そこで、わたくしたちは自然破壊防止のための運動の必要性を痛感するものである。

幸い、おくればせながらではあるが、環境庁などの発足を機会にこうした環境保護運動を、わたくしたち国民一人一人が認識するとともに、一日でも早く自然破壊を食い止め、汚れ切った空や海をあくまでも青く、また、大地に緑をそして人類が残してきた貴重な文化財を立派に保護し、次の世代へ責任をもって伝えるよう行動し、努力しなければなるまい。

保護と普及

小川　久雄

八幡区大蔵字入地に「従是西筑前国」の国境碑がある。

むかしは、八幡製鉄所の三条職工官舎の道路そばの塚状の高みにたっていて、附近の子どもの遊び場でもあり、いつでも自由にあがっていって、二川相近の名筆に酔うこともできた。

戦後、この職工官舎がこわされ道路を整備し、新しい社員社宅が建てられてみると、この国境碑は社宅に住む個人の庭の中となり、コンクリート塀に囲まれてしまいいちいち居住者の許可を得なければ近づけなくなり、しだいに人々から忘れられようとしている。

しかし、その為にこの碑にいたずらをする人もなく、保護とまではいかないにしても、保存には好都合となった。

人々に知られず保護されていく文化財、人々に知れわたった為にしだいに痛められ破壊されていく文化財、どちらが良いのか。

もちろん、保護されつつ普及され、普及されつゝ保護されるのがいちばん良いにきまっているが、保護と普及のバランスはむずかしい。国境碑のような例は、日本中枚挙にいとまがあるまい。

第三回文化財めぐりに参加して

林　末春

十一月二十八日、季節にしては稀な好日和、初めての文化財めぐりに胸をはずませた。

平尾台では、破壊されて自然は再び元にはもどらない、企業と観光と保護との三者の調和が如何に難しいかを眼の前にして、言い知れぬ悲しさと憤りを感じた。

法円寺では、「梵鐘の撞坐の回りの花びらの一つ〳〵から露が滴っている。」とか、ある博士は九時～十六時頃までじっと見入り、「離れ難い」と別れを惜しんだとのこと。

鷲峰山大興禅寺では、木造釈迦如来像と、七百万円をかけて、復元した仁王像に接し、山門の偉容と共に昔日を偲んだ。

文化財めぐりは「足でその場所を知り、眼でその美を鑑賞し、現状を確か　書物にものっていないことを知る。」このような諸点を十分満足させてくれる一日でした。今後もこのような企画を楽しみに期待している一人です。

第一回文化めぐりに参加して

上野真知子

随分前のことで、あの日は寒い日だったかなあーと思うくらいです。でも、上ん山古墳、堀越の十三塚、広寿山福聚寺、どこも初めてのことで、貴重なお話を伺って今まではただ興味本位の史蹟めぐりなどについてゆくだけで後になって何処に行ったのだったかな、とすしも身につかないピクニックのようなものでした。

それが今回はすこしでも勉強したぞ、という気持になれ、自分達が住んでいる北九州にもこんなに歴史のあと文化の遺産がたくさんあることを知りよい機会を得たことを嬉しく思いました。同時におとしよりの方ばかりなのがちょっと淋しく、わたくしのような若い人こそどんどん参加して郷土の文化財への認識を深めるべきだと思いました。

最後に行った万葉の庭にはもう一度行って、いにしえの心に帰って味わいを深めたいと思いましたし、広寿山の静かなたたずまいの中では、もっともっとお話を聞きたいと思いました。

忙しいだけの日常の中で充実した一日を過ごすことができました

昭和46年の会のあゆみ

1.16　北九州市の文化財を守る会発足
2.17　常任理事会開催
25　会報No.1発行
3.14　第1回バスによる文化財めぐり実施
4.23　理事会開催
5.28　会報No.2発行
6.13　第2回バスによる文化財めぐり実施
7.2　常任理事会開催
8.19～21　夏期文化財講座開講
10.21　常任理事会開催
11.28　第3回バスによる文化財めぐり実施

――江戸期の中国渡来文化展講演から――

黄檗宗と日本文化

九大教授　谷口鉄雄

黄檗のもたらした文化の中で、特に絵画・彫刻・書についてお話したいと思います。

絵画について

黄檗絵画を分析すると、二つの特徴があります。一つは非常に写実的だということ、もう一つは洋画的技法を持っているということですが、写実的というのは、中国絵画の根本的な特徴であります。

これは宋の時代からその傾向がありますが、人物を描く場合、顔だけは非常に丁寧に写実的に描きながら、下の方の衣服などはおおざっぱにかいています。これはどういう考え方かというと、中国人にとって人物画は、古く漢時代からの絵画の中心的な仕事であって、写真のような役目を持っていたので、画工は写実的にかくということを、根本的に要求されました。だから顔は非常に精細にかいています。唐時代になると、わら筆で描くようなはげしい筆の使い方をするようになりますが、それが特に着物の描き方に出てきます。

このやり方が、黄檗の絵にも出て来ているわけであります。

もう一つの油絵的要素について申しますと、キリシタンによって伝えられた油絵の技法が、キリシタン弾圧後は長崎で潜伏した状況で伝えられていたのが、黄檗の絵画に至って表面に出てきたのか、それとも中国から黄檗宗が伝来する時に、すでに中国にそういう油絵の技法があって、それが黄檗宗とともに日本に伝えられたのかという問題ですが、日本にキリシタンが来たのと同じように、中国にもキリシタンが来て、中国にも洋画の技法を伝えたわけです。特に洋画の技法が中国で摂取されたのは、福建から広東あたりですが、黄檗宗も福建から日本へ伝えられたものですから、洋画的技法がすでに中国で黄檗系の絵の中に入っていたのではないかと推測されます。はたしてそうであるかどうかについては、福岡千眼寺蔵「范爵筆十八羅漢図」が参考になります。

范爵は、日本に渡来した黄檗系の彫刻家范道生の父で、「十八羅漢図」は范道生が中国から持って来たものと思われます。その中国で描かれた「十八羅漢図」を詳しく見てみますと、そこにすでに洋画的要素がうかがわれます。また「陳賢筆　観音図」にもそういう画風が出ています。このように中国ですでに、ある種の洋画的なものが黄檗系の絵画の中にあったのではないかと私は推測しています。

キリシタン絵面と、次のオランダ絵画（紅毛画）の中間の時期をうめてくれたのが、黄檗系絵画です。

黄檗系絵画は非常に日本に影響を与えました。というのは、このころの日本絵画は、桃山から江戸初期の豪快華麗な絵画の時代をすぎて、マンネリズムに落ち入った状態にあり、新しい刺激が必要でありました。隠元一行が関西に到着した時、狩野派系統の画家が、なんとかしてこの人達に会うことを切望しています。特に狩野派の北画系の絵は、すっかり行きづまりを見せていて、なんとか新生面を開こうとせまられていたところに、そういう新しい文化をになった人達が来たので、早く接して打開したいという気があったのでしょう。

麻姑仙女図（長崎市花月蔵）

また隠元招へいの中心となった逸然は、北画系の画家ですが、逸然を通して、再び新しい北画の系統が入っていますし、またもう一つ重要なことは、この黄檗宗の人達が南画的なものを持って来たのではないかと推測されることであります。南画には、例えば「芥子園画伝」のような一種の絵手本といったものがありますがこれをたくさん持って来たのではないかと思われます。この辺から日本の南画が少しずつ始まり、のちに池大雅などが出て来るもとになったものと推測されます。

黄檗と直接関係あるかどうかわかりませんが、長崎の市立博物館に、中国から持って来たものと思われる版木がたくさんあります。

当時、日本の画家や書家は、中国から来る実物の絵や書を非常に欲しがったのですが、手に入れるには渡来品の数が少なく、また、難しいので、このような版木が中国からもたらされて、それで刷って需要を満たしていたのではないかと思われます。

中国の絵画の伝統の中に、仙女や女官といった女性を優麗に描く流れが早くからあって、展示されている「麻姑仙女図」もそういう流れを示すもので、その画風がうかがわれます。また「関帝像」を見ますと、その筆力といい、気宇の大きさといい、日本人にはちょっと真似のできないものがそこにあります。

彫刻について

「達磨大師」や「関帝像」は、日本の彫刻の持たない生々しい人間臭さにあふれています。日本の彫刻は鎌倉時代までが花で、江戸時代になると、彫刻というより小手先の工芸に堕落してしまっています。そういう時に黄檗系の彫刻が入って来たことは、当時の日本にとって新しい刺激であったはずです。

しかしこの中国的なものをそのまま受け入れられたかどうかは、疑問であります、というのは当時の日本は、あれだけの彫刻をやるだけの気力を失っていたと考えられます。日本の彫刻の誰にどういう風に影響したか、いっこうによくわかりません。そういう意味では黄檗系の彫刻は、日本では特殊な彫刻に終っているのだと思われます。

その点では絵画の方でも喜多元規などの黄檗系の画像は特殊な絵画であって、それがどこまで日本の画壇に影響を与えたか、黄檗系の限られた世界であの画像は終っているのではないかと考えます。

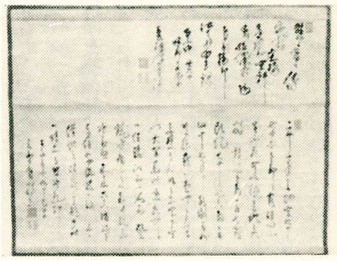
むしろ黄檗系の画像よりは、それといっしょに来た羅漢図や関帝図・仙女図・花鳥図などの方が日本の画壇に後に展開していく端緒を与えたのではないかという気がいたします。

龍潤作木彫達磨大師像（千眼寺蔵）

書について

中国では僧侶の書は、本流に入らない、破格なものということになっています。

やはり日本では書も当時、マンネリ化していて、黄檗系の書が大きな影響を与えたことは事実であります。日本では、鎌倉・室町時代に、禅僧の書の影響をうけたわけですが、禅僧の書という破格の書から日本の書が影響を受けたことは、日本の書にとって必ずしも好ましいことではなかったのではないかと思われます。今日、墨蹟と称して禅僧の書が尊ばれますが、そして特に茶道においてそうですが、これは破格の書をも喜ぶという意味において結構なことといものでしょうか、必ずしも中国では高く評価されているわけではありません。隠元は年をとってから日本へやって来ましたが、隠元の書は、むしろ彼が中国にいた頃の初期のものが、文人的な風格をもっていて非常に良いものがあるといわれています。日本に来てからは禅僧という立場で書をかいているようであります。黄檗の僧は、禅宗の僧であると同時に高い教養をもった文人でもあったので、文人の書という側面が、（それが中国ではオーソドックスな書なのですが）その側面が、隠元の場合、かくされていたのではないかという気がいたします。その点からみると、独立（どくりゅう）の書には本格派の書風がみられます。独立は、本来は非常に教養の広い文人で、中国の佩文斎書画譜という本（皇帝が臣下に命じて書家・画家の伝記や理論などを編さんした本）に独立だけがのっています。



独立和尚書（万福寺蔵）

黄檗僧の書は、沈滞していた日本の書道に影響を与えましたが、彼等の書の中で、どこがオーソドックスで、どこが禅僧的な破格なものであるかを見きわめる必要があります。一度は、最も核心のオーソドックスの書というものを頭においた上で、あの破格の書を鑑賞すべきであろうと思います。

は思いますが、一方では、禅僧の書は、オーソドックスからはみ出したものであるということを知っていただきたいと思います。

隠元の書は、特殊な書風で面白

平尾台保護のため
関係先に要望書提出を決定

平尾台問題を協議する理事会が、1月18日午後2時から戸畑文化ホール会議室で開かれました。

まず教委・文化課長を招き、市の平尾台保金対策のこれまでの経過について説明を聴取したのち、会としての今後の対策を協議しましたが理事のみなさんの終始活発な意見の続出で延々3時間近くも論議が交わされました。

その結果、まず北九州市長および関係の企業に対しこれ以上の破壊が行なわれないよう要望書を提出することとし、今後もひきつづき会の総力を結集して、平尾台問題に取り組むことを申し合せました。

文化財パトロールの日
（毎月第1日曜日）

本会では、毎月第1日曜日を文化財パトロールの日としています。

会員のみなさんも、この日は付近の文化財のパトロールを行なって、お気付きの点がありましたら本会事務局（TEL㊽4931）まで通報してください。